

研 究

父親の育児関与尺度の開発
および信頼性と妥当性について

下 坂 剛

〔論文要旨〕

本研究の目的は、子育て期の父親の育児関与尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討することである。調査項目について因子分析を行った結果、第1因子「支持」(5項目, Cronbach's $\alpha = .894$), 第2因子「交流」(8項目, Cronbach's $\alpha = .824$), 第3因子「家事」(9項目, Cronbach's $\alpha = .856$), 第4因子「しつけ」(7項目, Cronbach's $\alpha = .832$), 第5因子「世話」(3項目, Cronbach's $\alpha = .807$)を抽出した。また4週間の間隔における2時点での下位尺度合計得点はいずれも正の相関 ($r = .712 \sim .797$)を示した。以上から本尺度の内的整合性と安定性の観点からの信頼性が確認された。また、子育て期の父親の育児関与尺度のいずれの下位尺度との間にも父親の育児関与尺度と正の相関 ($r = .275 \sim .701$)が認められ、併存的妥当性が確認された。これらの結果から、本研究の尺度は総合的な子育て期の父親の育児関与を量的に捉える際に有用であると考えられる。

Key words : 父親の育児関与, 子育て, 信頼性と妥当性

I. 研究目的

育児に関する研究で国際的に最も重視されつつあるのは、ワーク・ライフ・バランス (WLB) の概念であろう。WLBは「仕事上の責任を果たすと同時に、仕事以外に取り組みたいことや取り組む必要があることに取り組める状態」であり、「仕事以外で取り組みたいことや取り組む必要があることに取り組めなくなる状態」あるいは「仕事以外に取り組みたいことや取り組む必要があることに取り組むと、仕事上の責任を果たすことができなくなる状態」をワーク・ライフ・コンフリクト (WLC) という¹⁾。また、WLB研究の流れの中で、仕事と家庭の役割が相互にポジティブに影響を及ぼし合うこと、つまりポジティブ・スピルオーバー (PS) を重視するワーク・ファミリー・エンリッチメント (WFE) 理論も注目される²⁾。WFEは特に家庭役割での充実が仕事役割に活かされ充実させる側

面を重視している。近年、父親の育児行動に関する研究は増加しつつあり、成人男性が発達する主体として扱われる研究はそれほど多くないが³⁾、人がある対象への関係を維持し、かつ関係に愛着を感じる傾向について、コミットメントという概念を用いて説明する投資理論による研究⁴⁾、父親の育児行動に平等主義的役割態度とPSの影響を検討した研究⁵⁾、日本とオランダで比較すると育児行動は日本の父親のみ少ないという研究がみられる⁶⁾。一方で、父親の育児関与は、子どもと過ごす時間や子どもとの直接の関わり行動と操作的に定義されてきた⁷⁾。それでは、これまでの研究において父親の育児関与はどのように評価されてきたのだろうか。これまでに開発された父親の育児関与を評価する尺度には、育児行動の頻度や平日と休日の接触時間による育児参加^{8,9)}、父親の自己評定や母親の他者評定による子どもの世話や遊びやしつけなど5領域の父親の育児参与^{10,11)}、直接・間接の子どもとの

A Validation Study of the Scale of Fathers' Involvement in Childcare

Tsuyoshi SHIMOSAKA

四国大学生生活科学部人間生活科学科 (研究職)

[3045]

受付 18. 5. 28

採用 19. 4. 12

関わりという観点から父親の育児関与¹²⁾の測定を試みたものがある。

また、Hawkinsら¹³⁾は、父親の育児関与について、心理学的、情緒的、認知的、経済的、倫理的、精神的な側面に加え、関与する時間的な量や関与の内容、父親が子どもを世話する独特な側面、状況に応じて文脈を捉えた多様な点を考慮すべきとし、「しつけと責任」、「通学の促し」、「母親サポート」、「扶養」、「一緒に時間を過ごす」、「褒めることと愛情」、「才能と将来の関心を伸ばす」、「本読みや宿題のサポート」、「注意力」の9つの下位尺度からなる父親の育児関与尺度を作成した。さらに、Debeauら¹⁴⁾は父親の育児関与は、子どもの身体・心理的発達と幸福を目的として、父親あるいはその代理となる人が持続的にしっかり関わることであるとし、「情緒的サポート」、「しつけ」、「世間への開放性」、「身体的世話」、「身体的遊び」、「喚起」、「家事の雑用」の7つの下位尺度からなる父親の育児関与尺度を作成している。

また、Lamb¹⁵⁾は父親の育児関与を、①相互作用（ご飯を食べさせたり、庭でキャッチボールをするなど）、②近づきやすさ（親は台所にいて子どもは隣の部屋で遊んでいたりと、料理をしている足元で遊んでいるなど）、③「責任」（子どもが病気のとときに病院を予約したり、服を着せるなど）の3要素で捉えるべきだと主張した。また、Palkovitz¹⁶⁾は、父親の育児関与を概念化する際、認知的、情緒的、行動的な3つの要因、Amato¹⁷⁾は、父親の育児関与が子どもの主観の幸福感に影響を及ぼす要因に、①人間的な資本（達成を促進することと模倣すること）、②経済的な資本（子どもの健康や安全、成長や成功を支える資源）、③社会的資本（共同養育の関係あるいは親子関係のように子どもに利益を与える関係）の3要因を重視した。このようにみても、これまで日本で使用されてきた父親の育児関与を測定する尺度は多いが、父親の育児関与は多くとも3つの要素までで捉えられており、多様な側面を捉えることには限界がある。

以上のことを踏まえ、筆者は新しい父親の育児関与尺度を作成することにした。本研究では、「子どもの心理的な支え」、「子どもと同じ時間を一緒に過ごす交流」、「育児の基盤となる家事の遂行」、「生活に必要な基本的マナーのしつけ」、「日常生活に必要な子どもの世話」の5因子を想定して子育て期の父親の育児関与尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを

目的とした。

II. 方 法

1. 調査対象者および調査方法

A県の幼稚園2園、認定こども園6園にそれぞれ調査協力を依頼した。3～6歳までの園児の父親に無記名の質問紙を配布し、1週間後に回収した（配布数850部）。このうち、信頼性を確認するために再検査をお願いした200人の父親には、4週間の間隔を空けて2回調査を実施し、その際1回目も2回目も記名式で行った。これらの調査は2017年5～9月に実施した。

2. 調査項目

1) フェイスシート

対象となる父親の年齢、職種、週あたり労働時間、1か月の平均休日数、母親の年齢、職業形態、対象となる3～6歳までの子どもの年齢、性別、出生順位、両親との同居の有無、実家の育児サポートの有無の記入を求めた。

2) 子育て期の父親の育児関与尺度

本研究に先立って2016年9月～2017年2月にかけて行われた面接調査では、初めての子どもが生まれて1年が経過した父親5人に対し、「仕事と育児、家事の両立はどのようにされていますか」と質問した。得られた回答とHawkinsら¹³⁾とDebeauら¹⁴⁾の父親の育児関与尺度の項目を参考に、「子どもの心理的な支え（12項目）」、「子どもと同じ時間を一緒に過ごす交流（10項目）」、「育児の基盤となる家事の遂行（11項目）」、「生活に必要な基本的マナーのしつけ（10項目）」、「日常生活に必要な子どもの世話（15項目）」という5因子を想定した。なお、Debeauら¹⁴⁾の尺度では家事に関する尺度は5項目（食事の用意、皿洗い、洗濯、おやつの準備、家の掃除）であったが、本研究ではこれらに6項目（洗濯物をたたむ、トイレ掃除、食材の買い物、生活費の管理、ゴミ出し、風呂掃除）を加えて合計11項目としている。以上のように、子育て期の父親の育児関与尺度を作成し、この尺度を用いて父親の育児関与度を測定した。なお、作成した尺度は心理学を専門とする研究者3名に内容的妥当性のチェックを受けた。「以下の文章を読んで、ふだんあなたは自分自身で、父親としてそれらのことをどの程度していると思いますか。あてはまると思うところに1つだけ○をして下さい」という教示文に対して、「全くしていな

い(1点)、「あまりしていない(2点)」、「半分ぐらいはしている(3点)」、「だいたいしている(4点)」、「いつもしている(5点)」の5段階評定で回答を求めた。点数が高いほど父親がその育児関与を遂行していることを示すものである。さらに、あてはまらない状況は「なし」という選択肢を全項目で設けた。

加えて、併存的妥当性を検討するため、従来の先行研究の中で、因子数は少ないものの、比較的父親の育児関与を適切に捉えている森下¹²⁾による「子どもとの遊びや世話(6項目)」、「育児への関心(3項目)」の2因子から構成される尺度も用いて測定した。「全くしない(1点)」～「いつもしている(5点)」の5段階評定で回答を求めた。

3. 倫理的配慮

それぞれ幼稚園と認定こども園の代表者に対し、研究の目的および方法、調査結果の開示、研究の匿名性、研究への参加の自由と、不参加でも不利益が生じないなどを文書で説明し、対象者へ配布を依頼した。調査対象者へも同様の内容を文書で説明した。なお、研究にあたって四国大学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号:29001)。

なお、分析にはHAD ver.16¹⁸⁾を用いた。

III. 結 果

1. 調査対象者の属性

質問紙を配布した父親850人のうち、欠損値のある回答を除く313人(回収率37%)を分析の対象とした。対象となる父親の年齢、職種、週あたり労働時間、1か月の平均休日数、母親の年齢、職業形態、対象となる3～6歳までの子どもの年齢、性別、出生順位、両親との同居の有無、実家の育児サポートの有無については表1に示した。なお対象となる子どものうち年齢が同じ双子が5組いた。

2. 父親の育児関与尺度の因子分析

全59項目のうち、項目「保育園や幼稚園、学校で割り当てられた役割を果たす」(24%)、項目「子どもの習い事の送り迎えをする」(29%)、項目「子どものおむつ交換をする」(35%)、項目「子どものミルクを作って飲ませる」(63%)の4項目において「なし」の回答が多かったため、項目から除外した。それ以外の項目で「なし」と答えたのは最大で19人とこれらは誤差

表1 対象の概要

回答者と家族の属性		母親と子どもの属性	
父親の平均年齢 37.9歳 (SD5.23) (最小22～最大57)		母親の平均年齢 36.8歳 (SD4.59) (最小25～最大49)	
父親の職種		母親の職業形態	
サラリーマン	196 (62.6)	フルタイム	122 (39.0)
教員	6 (1.9)	パートタイム	85 (27.2)
公務員	41 (13.1)	専業主婦	79 (25.2)
自営業	48 (15.3)	その他	27 (8.6)
その他	22 (7.0)	対象児性別	
父親の労働時間(週) 51.3 (SD11.99) (最小11～最大100)		男児	162 (51.8)
		女児	148 (47.3)
		無回答	3 (1.0)
父親の休日(月平均) 6.8 (SD2.42) (最小0～最大20)		対象児年齢	
		3歳	54 (17.3)
		4歳	118 (37.7)
		5歳	116 (37.1)
		6歳	22 (7.0)
両親との同居		無回答	3 (1.0)
あり	43 (13.7)	対象児出生順位	
なし	268 (85.6)	第1子	170 (54.3)
無回答	2 (0.6)	第2子	118 (37.7)
両親の育児サポート		第3子	19 (6.1)
あり	200 (63.9)	第4子	2 (0.6)
なし	106 (33.9)	第5子	1 (0.3)
無回答	7 (2.2)	無回答	3 (1.0)

の範囲と判断し、そのまま以下の分析に用いた。次に残りの55項目の得点分布においては、天井効果が認められたのが4項目、フロア効果が認められたのが2項目あったため、計6項目を以下の分析から除外した。次に、因子数を決定するために最尤法によるスクリープロットにより、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から、5因子が適切と判断された。49項目について5因子を仮定して、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。さらに因子負荷量0.4未満だった16項目と、複数の因子に因子負荷量0.4以上を示した1項目、計17項目を除外した32項目について、再度因子分析を行った(表2)。なお、以上の5因子の全分散を説明する割合は55.8%であった。

第1因子は、「子どもが不安がっているとき安心させる」や「子どもが泣いているとき慰める」など、子

表2 父親の育児関与尺度：因子分析（最尤法・プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3	F4	F5	共通性	平均	標準偏差
支持 (α =.894)							18.53	3.89
子どもが不安がっているとき安心させる	.85	.06	-.06	.01	-.02	.77	3.74	0.91
子どもが泣いているとき慰める	.79	.08	-.04	-.04	.00	.66	3.66	0.92
子どもが悩んでいたたり辛そうなそぶりをみせるときは寄り添う	.70	.17	.07	-.08	-.02	.62	3.72	0.94
子どもが混乱状態にあるときは丁寧に関わって落ちつかせ何が問題なのか話をきく	.65	.04	.03	.11	.07	.60	3.60	0.95
子どもが困難なことを成し遂げるよう励ます	.50	.21	-.01	.13	.09	.57	3.83	0.91
交流 (α =.824)							25.27	5.33
子どもがしたいことで一緒に時間を過ごす	-.11	.87	-.04	-.12	.06	.60	3.37	0.88
子どもたちが話したいことがあるときじっくり話をする	.16	.67	-.07	.08	-.06	.62	3.52	0.89
子どもにさまざまな運動に触れさせる	.02	.65	-.04	.12	-.03	.49	3.18	1.04
子どもを公園に連れて行く	.12	.58	.07	-.20	-.04	.37	3.39	1.02
子どものテレビ番組と一緒に見る	-.10	.57	.04	-.06	.13	.31	3.41	1.04
子どもが好きな音楽と一緒に聴く	.07	.51	.00	-.01	.09	.35	3.06	1.07
子どもの教育に良いゲームやおもちゃを家にもって帰る	.06	.44	-.06	.19	-.06	.30	2.50	1.00
子どもをピクニックに連れて行く	.14	.42	.07	-.10	-.07	.24	2.74	1.08
家事 (α =.856)							24.87	7.75
洗濯物をたたむ	-.02	-.03	.80	-.02	-.08	.58	2.50	1.25
洗濯をする	-.10	.08	.73	-.05	-.01	.52	2.51	1.35
家の掃除をする	.21	-.18	.72	-.04	-.03	.52	2.74	1.17
食事の後片付けをする	-.18	.15	.65	.11	-.03	.48	3.02	1.25
トイレの掃除をする	.14	-.10	.65	-.04	-.02	.41	2.31	1.26
ゴミ出しをする	-.04	.09	.55	-.06	-.02	.30	3.58	1.41
お風呂そうじをする	.04	-.08	.53	.04	.10	.33	3.29	1.31
食材の買い物に行く	-.03	.06	.50	.02	.07	.29	2.66	1.11
食事を用意する	-.07	.02	.49	.16	.13	.36	2.37	1.16
しつけ (α =.832)							25.38	4.67
子どもに食事のマナーを教える	-.04	.05	-.03	.78	.06	.62	3.52	0.96
子どもが大騒ぎをしたら注意する	-.04	-.22	.02	.73	.02	.45	4.10	0.84
子どもにおもちゃの後片付けをさせる	-.03	.04	.04	.69	-.03	.48	3.53	0.98
子どもにしてはいけないことのルールを教える	.12	.01	.01	.66	-.01	.53	4.15	0.81
子どもが言うことを聞かなかったら叱る	.02	-.24	-.08	.64	.06	.35	3.94	0.86
子どもに自分がすることに責任をもつよう教える	.07	.15	.10	.53	-.08	.44	3.24	1.05
子どもに家の手伝いをするようにいう	-.05	.26	.02	.51	-.10	.37	2.89	1.03
世話 (α =.807)							10.46	3.01
子どもの入浴の世話をする	-.07	.05	-.03	.01	.92	.81	3.82	1.12
子どもの洗顔や洗髪の手伝いをする	.06	-.05	.00	.00	.82	.68	3.73	1.14
子どもを夜寝かしつける	.11	.10	.12	-.03	.51	.43	2.89	1.28
	因子間相関	F2	F3	F4	F5			
	F1	.64	.23	.48	.38			
	F2		.26	.39	.31			
	F3			.29	.36			
	F4				.26			

子どもの心理支援を表す5項目によって構成されていたため「支持」と命名した。

第2因子は、「子どもがしたいことで一緒に時間を過ごす」や「子どもたちが話したいことがあるときじっ

くり話をする」など、子どもと同じ時間を一緒に過ごす交流を表す8項目によって構成されていたため「交流」と命名した。

第3因子は、「洗濯物をたたむ」や「洗濯をする」など、

表3 育児関与尺度との相関

下位尺度	子どもとの遊びや世話	育児への関心
支持	.566***	.459***
交流	.577***	.483***
家事	.391***	.275***
しつけ	.329***	.388***
世話	.701***	.276***

*** $p < .001$

育児の基盤となる家事の遂行を表す9項目によって構成されていたため「家事」と命名した。

第4因子は、「子どもに食事のマナーを教える」や「子どもが大騒ぎをしたら注意する」など、基本的マナーのしつけを表す7項目によって構成されていたため「しつけ」と命名した。

第5因子は、「子どもの入浴の世話をする」や「子どもの洗顔や洗髪の手伝いをする」など、日常生活に必要な子どもの世話を表す3項目によって構成されていたため「世話」と命名した。

因子間相関は $r=.26 \sim .64$ と全て正の相関を示しており、本尺度の下位尺度は相互に正の相関関係にあるといえる。

この5因子について Cronbach の α 係数を求めたところ、第1因子「支持」では .894、第2因子「交流」では .824、第3因子「家事」では .856、第4因子「しつけ」では .832、第5因子「世話」では .807 であり、十分な内的整合性が確認された。

3. 父親の育児関与尺度の妥当性

父親の育児関与尺度の妥当性を検討するために、父親の育児関与尺度の5つの下位尺度合計得点と、森下¹²⁾の父親の育児関与尺度の2つの下位尺度合計得点との間で相関関係を検討した(表3)。その結果、「支持」は「子どもとの遊びや世話」と $r=.566$ ($p<.001$)、「育児への関心」と $r=.459$ ($p<.001$)、「交流」は「子どもとの遊びや世話」と $r=.577$ ($p<.001$)、「育児への関心」と $r=.483$ ($p<.001$)、「家事」は「子どもとの遊びや世話」と $r=.391$ ($p<.001$)、「育児への関心」と $r=.275$ ($p<.001$)、「しつけ」は「子どもとの遊びや世話」と $r=.329$ ($p<.001$)、「育児への関心」と $r=.388$ ($p<.001$)、「世話」は「子どもとの遊びや世話」と $r=.701$ ($p<.001$)、「育児への関心」と $r=.276$ ($p<.001$) といずれも有意な高い正の相関を示した。

4. 父親の育児関与尺度の再検査法による信頼性

それぞれの因子の1回目と2回目の合計得点について相関係数を算出したところ、「支持」では $r=.718$ ($p<.001$)、「交流」では $r=.712$ ($p<.001$)、「家事」では $r=.714$ ($p<.001$)、「しつけ」では $r=.763$ ($p<.001$)、「世話」では $r=.797$ ($p<.001$) と全て有意な正の相関係数が得られ、信頼性が確認された。

IV. 考 察

本研究では、これまでの Hawkins ら¹³⁾と Debeau ら¹⁴⁾の研究をもとに、父親の育児関与について、多面的な側面から測定することを目的に、「支持」、「交流」、「家事」、「しつけ」、「世話」の5因子からなる父親の育児関与尺度を作成した。因子分析により本尺度の因子構造を確認し、次いで信頼性を検証した。また、森下¹²⁾による2因子から構成される父親の育児関与尺度との関連により、妥当性を検証した。以下、主な点について考察する。

1. 子育て期の父親の育児関与尺度の因子構造

因子分析の結果、子育て期の父親において「支持」、「交流」、「家事」、「しつけ」、「世話」の5因子が確認され、各項目の因子負荷量も十分な値を示していた。本研究における5因子は、Lamb¹⁵⁾による父親の育児関与の3要素のうち、「相互作用」と「責任」の2つの内容を含んでいる。また、Palkovitz¹⁶⁾が指摘した父親の育児関与に必要な3要因のうち、本尺度は「情緒的要因」と「行動的要因」の2つが含まれている。これらの結果は、本研究が想定した5つの構造がこれまでの父親の育児関与研究における先行研究の各理論とも整合性をもっていることを示すものである。因子間相関は「支持」と「交流」、「しつけ」との間でいずれも中程度以上の値を示している。特に「支持」と「交流」は内容的に類似した因子ではあるが、「交流」は子どもと一緒に時間を過ごすことに焦点が当てられ、「支持」はそうした関わりの中で子どもの心理的なケアを行うことを表しているため、別々の因子として捉えるべきである。また、「しつけ」は子どもとの関わりの中で「支持」とは異なり、子どもへの厳しい接し方を表しており、こちらも別々の因子として捉えることが適切であろう。

本尺度は、育児行動における子どもとの関わりのうち、実際に遊びなどを通じてともに過ごす「交流」や、

身体的・心理的双方のケアにあたる「世話」と「支持」、指導的な役割を果たす「しつけ」に加え、育児の基盤となる妻との分担を行う「家事」によって多面的かつ幅広く網羅されており、実際の育児関与をより適切に捉えている5因子構造が得られたことに意義があるといえる。

2. 父親の育児関与尺度の信頼性と妥当性

子育て期の父親の育児関与尺度の5つの下位尺度のCronbachの α 係数はいずれも高い値を示していたことから、本尺度の内的整合性の観点からの信頼性は確認された。また、4週間の間隔を空けて実施した子育て期の父親の育児関与尺度の下位尺度間の相関係数の分析では、全て強い相関が確認されたことから、本尺度は安定性の観点からも十分な信頼性を備えていることが示された。

次に、新たに作成した子育て期の父親の育児関与尺度項目について3名の心理学を専門とする研究者により、5つの構造の内容との整合性のチェックを受けており、一定の内容的妥当性を備えているといえよう。また、子育て期の父親の育児関与尺度の5つの下位尺度と森下¹²⁾による2因子から構成される父親の育児関与尺度の相関がいずれも有意な正の相関を示した。相関係数の強さの観点からみると、本尺度の「支持」、「交流」と森下¹²⁾の2因子、本尺度の「世話」と森下¹²⁾の「子どもとの遊びや世話」とのみ、いずれで中程度以上の相関がみられ、それ以外は本尺度の5因子と森下¹²⁾の2因子は弱い相関があり、下位尺度間で相関の強さに違いがみられた。これら差異がみられたのは、森下¹²⁾の尺度は「子どもとの遊びや世話」、「育児への関心」という子どもとの関わりを捉えているが、本尺度における子どもを心理的にケアする「支持」や指導的役割を果たす「しつけ」、育児の基盤となる妻との分担を行う「家事」が含まれていないためであると考えられる。以上の結果から、本尺度は森下¹²⁾の尺度と5因子がいずれも正の相関がある点で内容的に類似しつつも、相関の強さからみると個々の因子には違いがあることが示され、一定の併存的妥当性が示されたと考えられる。

3. 今後の課題

本研究の調査対象者の居住地域はA県という限られた地域である。また、調査協力を依頼した施設に幼稚

園が含まれていたことから、調査対象者の子どもは3～6歳の未就学児に限定されている。ゆえに、今後は0～2歳の子どもや就学後の子どもをもつ父親の対象者も増やし、幅広い年齢層の父親に適用できる父親の育児関与尺度を作成する必要があるだろう。妥当性の検討については、今回は森下¹²⁾の父親の育児関与尺度を用いて併存的妥当性の検討を行うにとどまった。今後はほかの理論的関連性が予想される構成概念との相関を検討するなど、構成概念妥当性等の検討も行う必要がある。また、育児関与は本来は父親だけでなく、母親に偏って行われている現状がある。したがって、父親と母親双方に共通する育児関与尺度を作成し、両者の構造や量的差異を検討する視点も新たに必要であろう。

本研究の一部は日本青年心理学会第25回大会において発表された。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 佐藤博樹. 人事戦略としてのワーク・ライフ・バランス支援. 佐藤博樹編, 汐見稔幸, 佐藤博樹, 大日向雅美, 他監修. ワーク・ライフ・バランス—仕事と子育ての両立支援. 東京:ぎょうせい, 2008:5-6.
- 2) Greenhaus JH, Powell GN. When work and family are allies: a theory of work-family enrichment. *Academy of Management Review* 2005; 31: 72-92.
- 3) 大野祥子. 「家族する」男性たち—おとなの発達とジェンダー規範からの脱却. 東京:東京大学出版会, 2016.
- 4) 加藤邦子. 父親, 母親が子どもへのコミットメントを維持する要因. *家族社会学研究* 2007; 19: 7-19.
- 5) 成瀬 昂, 有本 梓, 渡井いずみ, 他. 父親の育児支援行動に関連する要因の分析. *日本公衆衛生雑誌* 2009; 56: 402-410.
- 6) 佐藤淑子. ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ父母の育児行動と育児感情—日本とオランダの比較. *教育心理学研究* 2015; 63: 345-358.
- 7) Hawkins AJ, Palkovitz R. Beyond ticks and clicks: the need for more diverse and broader conceptualization and measures of father involvement. *The Journal of Men's Studies* 1999; 8: 11-32.

- 8) 柏木恵子, 若松素子. 「親となる」ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究 1994; 5: 72-83.
- 9) 福丸由佳, 無藤 隆, 飯長喜一郎. 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観, 子ども観—父親の育児参加との関連. 発達心理学研究 1999; 10: 189-198.
- 10) 木田淳子. 父親の育児参与と幼児の発達に関する調査研究—共働き家族を対象に. 滋賀大学教育学部紀要 (人文科学・社会科学・教育科学) 1981; 31: 79-97.
- 11) 尾形和男. 父親の育児と幼児の社会生活能力—共働き家庭と専業主婦家庭の比較. 教育心理学研究 1995; 43: 335-342.
- 12) 森下葉子. 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究 2006; 7: 182-192.
- 13) Hawkins J, Bradford KP, Palkovitz R, et al. The inventory of father involvement: a pilot study of a new measure of father involvement. *The Journal of Men's Studies* 2002; 10: 183-196.
- 14) Dubeau D, Devault A, Paquette D. Father involvement: a multifaceted concept. Devault A, Forget G, Dubeau D, eds. *Fathering: promoting positive father involvement*. Toronto. University of Toronto Press, 2015: 47-70.
- 15) Lamb ME, ed. *The father's role: applied perspective*. New York: John Wiley & Sons, 1986.
- 16) Palkovitz R. Reconstructing "involvement": expanding conceptualizations of men's caring in contemporary families. Hawkins AJ, Dollahite DC, eds. *Generative fathering: beyond deficit perspectives*. California: Sage Publications, 1997: 200-216.
- 17) Amato PR. More than money? men's contributions to their children's lives. Booth A, Dunn J, eds. *Men in families: when do they get involved? what difference does it make?.* New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, 1998: 241-278.
- 18) 清水裕士. フリーの統計ソフト HAD—機能の紹介と統計学習, 教育, 研究実践における利用方法の提案. *メディア・情報・コミュニケーション研究* 2016; 1: 59-73.

[Summary]

This paper validated the scale used to evaluate the extent of involvement of fathers in the care of their children. Two hundred fathers of children aged 3-6 years old answered the questionnaire twice. Factor analyses extracted the following five factors: support (comprised five items, Cronbach's alpha=0.89); interaction (eight items, 0.82); housework (nine items, 0.86); discipline (seven items, 0.83); and care (three items, 0.81). The scale had internal consistency and concurrent validity with the father involvement scale by Morishita ($r=0.28-0.70$). Scores of five factors did not differ between the first and the second answers ($r=0.71-0.80$). The author concluded that the new scale is useful in evaluation of fathers' involvement in childcare.

[Key words]

father involvement, child rearing, reliability and validity